
老師の称号はいりません

朝霧零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

老師の称号はいりません

【Zコード】

Z9542Q

【作者名】

朝霧零

【あらすじ】

ネギ？ 誰ですかそれは？ 10歳の子供先生で関わるとめんどくさい人？

へえ～そんなことより格闘少女をどうにかできませんか？

無理ですか。そうですか。

格闘技やつたことないのに老師は嫌だなあ～。って話しだす。

ネタで書いているので続くかどうかは不明です。

気分が乗つたら更新するかも…（奇跡は起きないから奇跡って言つんですよ？）

続くか分からぬ話（前書き）

ネタ、やつつけ、思いつきで作られた話ですので期待はしないでください。

期待する人の方が少ないと思いますが。

続くか分からぬ話

それはたつた一言から始まつた。

side クーフェイ

「アイヤーもう居ないアルカ？」

私は下校途中の道端でいつものようにかかつて来る敵を返り討ちにしてたアル。

いつもと同じように……アル。

私は周りからバカだと言われていてバカイエローなんて呼ばれるアル。

自分でも自覚していてそれでもなんとも思っていなかつたが、最近少し悩んでいるアル。

もちろん勉強じゃないアル。

私の大好きな武術でアル。

この悩みはきっと誰もが一度は経験があるので、皆は乗り越えてきた悩みでアル。

そう、私は今スランプになっているアルヨ。

腕が落ちたとか思ったように動けないと感じないアル。

強くなつてる実感がなくなつてているアル。

昔は一日ごとに自分が成長しているのが分かり樂しくてし方がなかつたアル。

それがここ最近昨日の自分と比べてもおととの自分と比べても全く変化が感じられないアル。

武術に焦りは禁物だと分かっていても初めての事や未に戸惑つているアル。

こういうときは師が導いてくれたり、教本などからヒントを見つけて
たりできればいいのだけど…。

本を読む頭がないのが悔やまれるアルヨ。

「はあ～。もつと強い相手はいないアルカ……」

せめて師も本も無理ならライバルでもいないアルカと呟いた私はき
つと贅沢者ネ。

それでもつい願わずにはいられなかつたアル。
もつと強くなりたかつたから。
そんな私に聞こえてきた言葉。

「最後のやつもつと腰が使えればパーフェクトだつたな～」

それは私の運命の出会いといつものだったアルヨ。

s i d e ? ? ?

「今日の挑戦者は強かつたな～」

工学部の帰り道俺は今日の対戦を思い出しながら歩いていた。
対戦とは最近工学部が作成したR D D R（リアル・ダンシング・ダ
ンシング・リボルバー）のことである。

これはフィールドの中に入り画面に映っている人と同じようにダン
スを踊りその完成度で得点を決めるゲームである。
なんでもよく分からぬ技術を使つていてるために装置が工学部の部
室にしかない。

遊びのにいちいち工学部に行かなければならぬが、それをしてで

も遊ぶ価値のあるゲームだ。

密かにブームになつていてやりたがるプレイヤーは多い。
しかし、遊ぶのには工学部の人が必要なため一週間に一度しか遊べ
ない。

そうなると当然取り合いになる。

そこで工学部の連中は一月に一回大会を開きチャンピオンは優先的
に遊べるようにした。

そしてそのRDDRの初代チャンピオンにして現在3度目の防衛を
果たしたのは波羽峰 朔真。

俺のことだ。

チャンピオンの特権で練習しまくつたおかげで他の奴よりうまい自
信がある。

そして今日も大会を終え帰る途中つてわけだ。

「来週には新曲も入るらしいしまた練習しないとな」

今日は勝てたが来月も勝てるとは限らない。

踊る曲は毎回ランダムで苦手な曲に当たれば負ける事だつてありえ
る。

今回は一番得意な曲がきたから楽勝だつたけどな。
それにしても

「最後のやつもっと腰が使えばパーフェクトだつたな」

悔やんでも悔やみきれないものがある。

「最後に腰をもつと揃れば完璧だつたのに

「腰アルカ?」

「やう腰。足より先に出す勢いで捻っていれば……くう～おしゃいー。」

「十分捻ったつと思つたアルが？」

「足りない足りない。やりすぎたかつて思ひぐらいがあれにはちゅううどいい」

「な、なるほどアル」

ん？ そういうえば俺は誰と話をしているんだ？

s i d e クー

「最後に腰をもひと捻れば完璧だつたのに」

最後の技は崩拳。

震脚から腰への運動を経て腕へと衝撃を伝える技。

「腰アルカ？」

「やう腰。足より先に出す勢いで捻つていれば……くう～おしゃいー。」

ここまで言われるのはよっぽど悔しかつたアルネ。
それだけ私に期待をかけてくれていたのアルカ？
でも、

「十分捻つたつと思つたアルが？」

震脚から腕への連動には腰は重要なだとわかっているアル。自分では十分に腰を回していたと思ったアルネ。

「足りない足りない。やりすぎたかつて思つぐらいがあれにはちょうどいい」

「な、なるほどアル」

ここまで断言するからこほよほどの自信があるみたいアルヨ。

「なら少し見て欲しいアルヨ」

「あ、ああ」

少し詰まつたのが気になつたアルが今は集中ネ。腰をやりすぎと思うぐらいに捻るアル。足より先に出す勢いいらしきアルヨ。イメージはできたアル。いく……アル！

「霸つ……！」

な、なにアル……この感覚は！

今までとは比べ物にならないぐらい突き抜けた感じだつたアル！

「す、すげえ～」

「すういのは貴方アル！ 一田で私の悪いところを言いつぶしたネ！」

「はっ！？ いやいや！ 僕は何もしてねえよ。お前が天才なんだ

つて

「そ、そんなことないアル」

「いやいや。すげ~って」

自分のことは棚に挙げてずるいアル。
それよりこの人はすごく強いアルネ。
見かけは弱そうなのに一目で的確なアドバイスができるのは達人しか考えられないアル。

「私は古菲アル！ 貴方の名前は何アルか！？」

「へ？ 僕は波羽峰 朔真だけど？」

「朔真老師つて呼んでいいアルカ！？」

「ふ、老師？！ な、なんで？」

「これからもコーチして欲しいアルヨ」

「いいよ、いいよ。」

「あ、ありがとうアル！ それじゃあ老師明日は武道館で待ってる
アル！」

「老師はいい人アル！」

二つ返事で受けてくれたアル。

これで私はまた強くなることができそうアル。
明日が楽しみアルヨ。

「なら少し見て欲しいアルヨ」

「あ、ああ

何だらう?

ていうか誰だらう?

そして俺は何を見ればいいの?

うん。状況がさっぱりだ。

彼女が何か構え始めたけど……格闘技か?

あいにく格闘技とは無縁の生活だったから何の型かは知らないけど。

「霸つ……」

「す、すげえ~」

気合と共に打ち出された拳は素人が見てもすごかつた。
うん。すごすぎてよく分からなかつた。

速すぎて目が追いついてないからしちゃうがないよね?

「すごいのは貴方アル! 一目で私の悪いところを言い当てたネ!」

「はつ!? いやいや! 僕は何もしてねえよ。お前が天才なんだ
つて」

うん。よく分からぬ事を言われたが彼女が天才ってのは分かるぞ。
あとは分からんが。

何で格闘技の型を俺に見せたのかとか……。
まあ、話の流れが1番分からぬのだけどね。

「そ、そんなことないアル」

「いやいや。すぐつて

「私は古菲アル！ 貴方の名前は何アルか！？」

「へ？ 僕は波羽峰 朔真だけど？」

「朔真老師つて呼んでいいアルカ！？」

「ひ、老師？！ な、なんで？」

「こ、じれつてドッキリか何かなのか！？
本当に話しが分からん。

誰か俺に説明を要求するぞ！」

「これからもコーセーして欲しいアルヨ」

「いいよ、いいよ。（否定）」

俺に「コーセーとか無理だし。

格闘技なんかやつたことがないのにどうしてコーセーなんかしなくちゃならない！

これは宗教勧誘の格闘技版なのか？
クーフェイだつけ？

変なのと関わっちゃたなあ。

「あ、ありがとウアル！ それじゃあ老歸明日は武道館で待ってる
アル！」

……あれ？

なんか承諾したことになつてゐる?
どうして？

俺は確かにいよいよ断つたよな？

あ… そういうば友達が勧誘はいらなければぱり断らないとダメ
って言つてたつけ。

いいよ（遠慮）だと良いです（肯定）って受け止めるとか。

…ミスつた？

あれ？ 俺つてこれからどうなるの？

続ぐか分からぬ話（後書き）

思い付きから完成まで3時間の作品であるがゆえに誤字脱字はあるかも。

そして、クーの話しがおかしいなんてデフォなので気にしないで欲しいアルヨ。

作者は基本アルヨをつければいいと思つてゐるのだ。

矛盾がある？ それも気にしてはいけないよ？

なにせ作者は原作を5巻までしか読んでないからね！

あまりにも続けて欲しいとの声がありそつなら続きを書くかもしれない。

あくまで予定は未定ひとつじで。

クーセーのヒストリーロマンになるよつだ。（前書き）

次回策のネタがやはり出来ていらない作者……朝霧 零です。

続かないといいつつ2話目を書いてしまったが、いや~難産でした。
やはりプロットとかを確り作らないと難しいですね。

まあ、頑張って書いたので楽しんでいただければ幸いです。

クーナーはロードマップになるまい。

勘違いとは第三者の方が起じやすいものである。

side 朔真

今の俺はすぐ悩んでいる。

武道館に行くか行かないかで。

行けばあのクーって娘に絡まるのは分かりきっているが、行かないのも恐ろしい気がする。

なぜ絡まるのか昨日ずっと考えてみたがいつこうに分からずもう既に放課後間際だ。

教卓の前で先生が明日の注意事項を言っているがそれが終わったらタイムリミット。

いつたいどうしたものか……。

「起立、礼」

……つて終わるの早!

うえバツクレた方がいい気がしてきた。

「お~い、朔真。お前に彼女来てるぞー!」

「は? 僕に彼女なんていないぞ?」

「いいから早く来いよ」

な、なんだ？

いきなり彼女とか。

心当たりなんて……あ、る？

ははは、まさかねえ。

「朔真老師、待つてたアルヨ！」

……なんていのだらうかこの娘は。
まさか男子中等部にまで来るなんて。

「朔真。危険なのは夜道だけだと思つなよ」

おかしいね。

君と僕は良好なクラスメートの関係を作つていたと思つていたのに
ね。
なんでこんな事言われなくちゃならないんだろうね。
思わず死んだ魚のような目になつた俺は悪くないと思つ。

side クー

「クーちゃん」「機嫌だね？ どつしたのかにゃー？」

「ゆーなアルカ。実は老師ができたアルヨ」

「えつ！？ 老師？」

「そつアル。今から鍛錬が楽しみアルヨ」

「ちょっと待つたー！ そういうのはこの朝倉和美に話さないとダメじゃない！ それでそれで、老師って何？ どういう人？ 男？ 女？ 歳は？ 名前は？ どこまで関係が進んでいるの？ 出会いのきっかけは？」

「ちょ、ちょっと待つアルヨ」

「……はい、待つた。で？ 名前は？ ビニードあつたの？」

「あわわ～に、逃げるアル！」

「ちよ、ちよっとー くーちゃん！？」

あやや～ 失敗したアル。

朝倉に言つのはダメだつたアルヨ。

それよりこれからどうするアルカ。

少し早いアルが老師のお迎えに行くのもいいかもアル。

それに老師が武道館の場所が分かるかも不安アル。

よし！ そうと決まれば早速いくアルヨ。

……クラスとか分からぬアル。

むむ、どうしたものアルカ。

まさか玄関で躊躇とは思わなかつたアル。

「クーフェイさん？ どうかしましたか？」

「茶々丸アルカ？ 実は朔真老師のクラスが分からなくて困つてた
アルヨ」

「朔真老師？ 検索……ヒット6件。上の名前は分かりますか？」

「波羽峰 朔真アル」

「ヒット。男子中等部の2-Dクラスです」

「本当アルカ！？ ありがとうアル！」

「その朔真老師とはどんな人なんですか？」

「どんな？ そうアルネ……」

朔真老師は昨日あつたばかりでよく分かつてないアル。
でも、大事な師でアル。
それに優しそうな人だつたアルヨ。

「優しくて大事な人アル」

「そうですか。頑張ってください」

「ありがとうございます」

クラスも分かつたし早速向かうアル。

「茶々丸こんな所に居たのか」

「あつマスター申し訳ありません」

「いや、いい。何かあったのか」

「はい……クーフェイさんに大事な人が出来たそうです」

「なに！？ あの格闘バカにか？ 明日は災害でも起きたのかもしれんな」

「それでは今日中にハカセにメンテナンスをして貰つてきます」

「ああ、そうだな（明日にはクラス中に広まつてそいつだな）」

2 - D見つけたアル。

「起立、礼」

タイミングもばっちりアルネ。

「おっ？ なんで女子がここに？」

「朔真老師居るアルか？」

「朔真老師？ 朔真のことが？」

「そうアル」

「あ～居るけど何のよう？」

「迎えに来たアル」

「あん？ 一緒にどうか行くのか？ てことは彼女？」

「違うアル。朔真老師は私の師匠アル」

「あ～！（RDDRのことか） よくこんな娘引っ掛けたな～」

むつ！

良く分からぬアルが老師を悪く言うのは許せないアル。

「あはは、そんな切れんなつて。そんなに朔真が大事か？」

「当たり前アル！ 私の大事な人アル！」

「お～！（結構本気ぽいな）まあ、ちょっと待つてろ。 お～い、
朔真。お前に彼女来てるぞ！」

「だから彼女じゃないアル！」

「いいから早く来いよ

この男聞いてないアル。
つと、老師が来たアル。

「朔真老師、待ってたアルヨ！」

早く武道館で鍛練がしたいアルよ。
わくわくしてきたアル！

「（くつそー！ 幸せそうでムカつくー）朔真。危険なのは夜道だ
けだと思つなよ」

むつ！ 小声で言つても聞こえてるアル。

きっとこいつは老師の敵アルネ。

老師も感情のない目で見てるから間違いないアル。

私でも一瞬ゾクッてくる田ネ。

流石老師アル。

「ああ～クーフェイ？ なんで居るの？」

「迎えに来たアル！ それとクーでいいアル」

「あ～迎えね。……行きたくないなあ～なんて？」

「どうしてアル？ 早く行くアル」

動こうとしない老師の手を引っ張つてみたら以外に力が強いアル。足腰と腕の力があるから動かないアル。細身の体つきなのにやつぱりちゃんと鍛えているアル。でも武道館に来ないのは努力を見せたがらない人アルね。影で努力をする人も嫌いじやないアル。手も豆だらけで固いアル。

この豆の出来方は重量のある獲物を使つているアルね。

「あ、あ～……クー？ そんなに手を撫で回されると恥ずかしいのだが」

「ふえ？ 恥ずかしがる必要はないアルヨ」

この手は十分に誇つていい手アルヨ。

「えつ？」

そんなに驚くなんて。

隠れて修行してたから、褒められた事が少ないアルネ。これからは私が老師を確り見て褒めるアル。

老師立てるのも弟子の仕事アルヨ！

「わかつた。分かつたよ朔真。お前彼女と仲がいいのをクラスに見せびらかしたいんだな？」

この敵はまだいたアルネ。

「ちょ！？ ち、ちがうからな！」

老師が少し臨戦態勢アル。

老師の実力を見るチャンスアル。

「くそ～死ね！」

い、一瞬だつたアル！

顔めがけて放たれた拳を首を傾げるだけで交わして下からの左掌底であごを打つ。

相手も気配だけで交わそうとしたアルが相手の動きを見切つて上手くあごに入れているアル。

綺麗過ぎる流れアル。

あれを私がやろうと思つたら相手と何度も練習しないと出来そうにないアル。

これが老師の実力アルネ。

「行くぞ。クー」

なるほどアル。

さつきまで行きたくなかったのは敵を倒してなかつたからアルネ。
老師の考えを汲み取れないなんてまだまだ修行不足アル。
武道館では確りと修行をして老師の期待に応えなきやアル。

「わかつたアル」

これから老師と私の修行が始まるかと思つとワクワクするアルヨ。

s i d e 朔真

「ああ～クーフェイ？ なんで居るの？」

薄情な友人Aを無視してクーフェイをどうにかしよう。

このままじゃ毎日来られるかもしれない。

……明るくて良い娘そうだけど、ストーカーじゃないよな？

「迎えに来たアル！ それとクーでいいアル」

「あ～迎えね。……行きたくないなあ～なんて？」

「どうしてアル？ 早く行くアル」

うん。この娘すげ〜力強いね。

おかしいな。

俺つてこれでも家が酒屋で手伝いしてから力は強いはずなんだけど

……少し自信なくしたかも。

俺本気で踏ん張ってんのにこの娘余裕そうだし。
つて、何でこの娘は俺の手を撫で回してんの？

豆だけの手って珍しいのか？
酒瓶運んでると豆とか結構出来るんだよね。

珍しいのは分かるけどそろそろやめて欲しかつたり。
クーの手がやわかくて気持ちいいのは分かつたからさ。

「あ、あ～……クー？ そんなに手を撫で回されると恥ずかしいの
だが」

「ふえ？ 恥ずかしがる必要はないアルヨ」

「えつ？」

この娘に羞恥心てないの！？

俺は恥ずかしいですよ！

クラスに注目されてるし……ってクラス！？

ああ～そうだよね。

俺頑張つて動かなかつたし。
素直に動いとけば良かつた。

は～。きっと友人Aはこういう時“あれ”をするんだろうな。
めっちゃ見てるし。

あっ笑つた。

「わかった。分かったよ朔真。お前彼女と仲がいいのをクラスに見
せびらかしたいんだな？」

「ちょ！？ ち、ちがうからなー」

うん。

この流れはプランBだね。
俺こいつと頑張って練習したんだわ。

「くそ～死ね！」

殺陣を。

練習道理に来た右ストレートを首を曲げて交わし、俺が掌底のアッパーでカウンター。

本当は右でやるんだけどクーが握ってるから左で掌底。

……あ。

この後俺の左手側に避けるはずだから……当たりますよね～。
あ、あはは～。綺麗に入りすぎで気絶しちゃったぜ！
と、とりあえず逃げるか。

「行くぞ。クー」

「わかつたアル」

ちなみに武道館じゃないぞって言つても通じないんだひうなあ～。

クーはひつじヒロインになるようだ。（後書き）

修行場へとたどり着いた2人。

そこで待ち受けていたのは思いもよらない人物が！

閃光と怒声が蔓延る場所で朔真とクーの命運は！？

「老師！ あぶないアル！！」

「俺にかまわず先に行け！ 時間稼ぎはあまり出来そうにない」

次回「和美乱入！ スクープは鮮度が大事！」お楽しみに！－！

……嘘です。

ネタも出来てないのに予告をしてみたアホな作者です。

次はいつたい何時更新するのだろうか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9542q/>

老師の称号はいりません

2011年3月25日17時16分発行